

水産業強化支援事業事後評価報告書

		水産試験場
政策目的	水産資源の持続的な利用・管理の推進	
政策目標	資源増養殖目標	
事業実施主体	滋賀県	
実施地区名	琵琶湖	
実施期間及び目標年度	実施期間	目標年度
	令和6年度	令和6年度
交付金額	473,000円	
事業計画の内容	琵琶湖のアユ資源管理に資する餌料状況およびスジエビ、ゴリの資源動向評価に資する資源状況調査	
評価	成果目標	
	現状値	(令和6年度末時点) ①餌料状況調査 6回 ②スジエビ生息状況調査 10回 ③ゴリ生息状況調査 3回
	目標値	(令和6年度末) ①餌料状況調査 6回 ②スジエビ生息状況調査 8回 ③ゴリ生息状況調査 3回
	(1) 現状値の説明	①近年、琵琶湖の重要漁業対象種であるアユの漁獲が不安定であり、漁業者のアユ資源に対する不安が増している。このため、アユ資源を支える餌の状況を即時的に把握する必要性が生じており、毎月実施している定点定期観測のプランクトン調査に加えてプランクトン調査を拡充して実施することとし、現状値は拡充して行った調査の実施回数とした。 ②③琵琶湖の漁獲対象種であるスジエビやゴリの資源動向を評価することは、漁業者のみならず加工業者にとっても重要であり、消費拡大や行政施策へ反映するための重要な事項である。そのための生息状況調査を実施することとし、現状値は調査実施回数とした。
	(2) 地域への経済効果 (ハード事業のみ)	
(3) 資源管理の取組状況等(ハード事業のみ)		
(4) 所見	①餌料状況調査では、ケンミジンコ類ノープリウスが、8月～11月まで過年度よりも著しく低く、アユのふ化後の初期餌料として重要なため、影響が危惧された。	

	<p>②稚エビは7月と8月に多く確認された。また、スジエビの死亡個体は、9月から11月にかけて水深90m水域で確認された。</p> <p>③ゴリの生息密度は7月に最も高い状況にあった。</p>
(5) 評価機関の意見等	なし
今後の改善方向等に関する分析	餌料状況と生息状況の把握を引き続き実施する。

水産業強化支援事業事後評価報告書

		水産試験場
政策目的	水産資源の持続的な利用・管理の推進	
政策目標	資源増養殖目標	
事業実施主体	滋賀県	
実施地区名	琵琶湖	
実施期間及び目標年度	実施期間	目標年度
	令和6年度	令和6年度
交付金額	583,000円	
事業計画の内容	西の湖や琵琶湖北湖などの漁場における環境状況調査およびアユ等の着臭メカニズムの解析	
評価	成果目標	
	現状値	(令和6年度末時点) ①西の湖等漁場環境動向モニタリング 5回 ②アユ等の着臭状況の把握 3回 ③漁場湖底の溶存酸素濃度の詳細調査 8回
	目標値	(令和6年度末) ①西の湖等漁場環境動向モニタリング 4回 ②アユの着臭状況の把握 3回 ③漁場湖底の溶存酸素濃度の詳細調査 8回
	(1) 現状値の説明	①②魚類の産卵繁殖場として重要な水面である西の湖では、ここ数年アオコが常態化し、真珠母貝の成長や生残が悪化している状況にある。また、過去にカビ臭を主体とする異臭魚が確認されていたことから、環境動向モニタリングおよびアユの着臭状況調査を実施し、現状値は調査実施回数とした。 ③漁獲対象魚種のスジエビ等の生息場所である琵琶湖沖合底層では、夏季以降に溶存酸素濃度が2.0mg/L以下となる貧酸素状態が令和元年から6年連続発生している。その実態把握と影響評価のため、現状値は調査の実施回数とした。
	(2) 地域への経済効果 (ハード事業のみ)	
(3) 資源管理の取組状況等 (ハード事業のみ)		
(4) 所見	①魚類調査の結果、重量、尾数ともにブルーギルが最も多く、過去二年の調査で最も多く採捕された在来魚のモツゴは次点となった。 ②カビ臭原因物質ジェオスミンは、モツゴと湖水から検出された。サンプリング当日に西の湖でアオコが発生しており、アオコが産生したジェオスミンがモツゴへ移行したと考えられた。	

		③沖合底層の溶存酸素濃度は9月下旬から12月中旬にかけて貧酸素の目安となる2.0mg/L未満を示した。
	(5) 評価機関の意見等	なし
今後の改善方向等に関する分析		地球温暖化により夏季から冬季における沖合底層での貧酸素化は常態化するものと思われることから、引き続き調査を継続する。